ストリートガイド

── ストリート研究の刷新にむけて ──

特集趣旨

ホームレス、ダンサー、在日外国人、ストリートパフォーマー、監視カメラ、ジェントリフィケーション、商店街、等々。ストリートにおける人々とその場の現在はどのような様相をみせているだろうか。大学院 GP 共同研究班「東アジアのストリートの現在」では、ストリートにおける、これまで出会うことのなかった人々の領域横断的な出会いから創発する、空間秩序再編成に着目している。そして、ある人々が構築する共同性と権力とのせめぎあい、背景の異なる複数の集団や個人の異なる利害の競合のなかで再認識される公共性、あるいは人びとの記憶と＜場＞の意味の付与などの問題系にフィールドワークによって接近し、共同と排除が錯綜し輻輳する空間を記述し解釈することを目指している。

この作業をすすめるにあたって、つぎの三つの問題群を、ストリート活動（支援する／踊る／集う／保存する等）の背後にある生活に着目しながら、解明することに重点を置いている。それは、「いったい誰と誰が①出会い（出会えず）、②交わり（向き合えず）、③繋がるのか（繋がれないのか）」という関係性の問いに言い換えられる。私たちは、ストリートを「領域横断的な出会いをとおして、創発する空間」として位置づけ、人々の関係性のなかでストリート現象の生起する過程を記述・解釈することを目的としている。

本特集では、関学ストリート班メンバーおよび、ストリート班研究会で報告・参加してくださった若手研究者によって、ストリート研究を開始するにあたって過去のストリート研究の批評、あるいはストリートを考えるうえで重要な素材など幅広い対象についてレビューがなされている。

あらゆる素材に向き合うなかで、ストリート研究のトピックスを生成しつつ、若手院生に向けてのガイドを果たすことができるよう、各執筆者が様々な角度から以下のようなそれぞれの課題を導き出してくれている。（1）ストリートはどこに存在するのか、（2）ストリートの欲望をどのようにとらえるのか、（3）ストリートと他者はどのような関係か、（4）ストリートをめぐる欲望はストリートの可能性とどのように連続するのか、（5）ストリートを支配する力とはどのようなものか、（6）ストリートにおける闘いとはどのようなものか、（7）いかにしてストリートを映像に記録するのか、（8）ストリートの人々をどのような関係性のもとに描くのか。どの問題提起も私たち自身がこれからストリート研究を刷新していくうえで避けては通れないものであろう。読者の創造力を駆動する特集となっていれば、幸いである。

（責任編集：山北輝裕）

ストリートの可能性を語る前に、その言葉は誰に届くのか

◇チェルフィッチュ、『三月の５日間』（2004年上演）

飯田　　豊

フリーターや派遣労働者の窮状を目の当たりにするなかで、「寄せ場」と化しているストリートに現代社会の混迷を見通し、絶望を感じている人は少なくないだろう。毛利嘉孝が『**ストリートの思想**』で指摘しているように、90年代には既に日本全体の「寄せ場」化が進んでおり、2008年以降、それが急速に可視化していったといえる。「フリーターとは、断片化され、流動化され、非物質化された、[…]『寄せ場』を持たない『日雇い』労働者の別称にほかならない。違いといえば、かつては物理的に山谷に行かないと仕事が探せなかったのが、インターネットと携帯電話のおかげで、どこにいても仕事を探せるという点だけである」。

その反面、毛利が丹念に示しているように、ストリートに確かな希望を見いだすこともできる。東京・高円寺の北中通り商店街を拠点に自活的なライフスタイルを模索し、荒唐無稽なデモ活動を実践している若者たちの姿を記録したドキュメンタリー映画『**素人の乱**』（2008年）を、その代表例として挙げることができる。もっともこれを、すがすがしい青春映画と微笑ましく捉える人もいれば、自分とは相容れない部族（トライブ）のモラトリアムと処断する人も少なくないことだろう。

ストリートの息吹をひとたび何らかの媒体に記録しようとするさい、自戒を込めて言えば、そのリアリティにこだわるほど、もとより文脈を共有していない他者にとっては、かえって現実に対する認識との〈ズレ〉ばかりが際立ってしまう。言い換えれば、こうした〈ズレ〉に対する想像力を内面化しておくことが、ストリートにアプローチするうえで、どうしても欠かせない。

＊

岡田利規の戯曲はしばしば、ストリートと壁一枚を隔てた場所が物語の舞台となる。

新国立劇場で上演された『**エンジョイ**』（2006年）で描かれたのは、新宿のマンガ喫茶で働く30歳を過ぎたフリーターの男性３人の姿である。店に入ろうとする路上生活者を彼らは追い返そうとするが、ふと自分たちの将来と重ね合わせてしまい、言いようのない不安に苛まれる。新宿西口通路の野宿者を排除するために設置された、悪評高いオブジェの映像が舞台に挿入されるなど、ストリートの冷たい息吹が間接的に伝わってくるが、それらはあくまで、男たちの日常的な恋愛話の後景に過ぎない。かつて都築響一が「ギザギザハートの現代美術」と呼んだ、ストリートにおける排除のアーキテク

チャ。その映像が舞台上に投影されても、それが男たちに届くわけではない（演劇自体の評価として、こうした人物設定や演出手法が他の岡田作品に比べて安直すぎるという批判には、僕も同意する）。

岡田が率いるチェルフィッチュの代表作『**三月の５日間**』（2004年）では、アメリカがイラク戦争を始めた2003年３月、反戦デモがゆっくりと行進する渋谷における、ある出来事が演じられる。否、語られる。六本木のライブ会場で初めて出会った男女が、そのまま渋谷のラブホテルに行き着き、５日間の性行為に耽るという話だ。食事のためにホテルから外出した２人が目にした渋谷の街は、いつもとはまるで違う、外国の光景のように見えたという。

> 女優１　それでその、渋谷が渋谷じゃないみたいな感をさらに演出、っていう感じだったのが、私たち、お昼もう食えねえだろっていうくらい食べてからお店出たんですけど、そしたらスクランブル（交差点）のほうから、あれ、なんかすごい盛り上がってる音が聞こえてきて、何かなっていう音が、聞こえて、そしたら、すごい、デモがちょうど通り過ぎていくところだったんですね、あ、なんかデモやってる、って手ェ引っ張って行ってみて（時計を見て）、近づいていったら、デモ、結構人で、あ、なんかナマで迫力それなりだ、って思ったんですけど、
>
> 男優３　（観客に）で、あ、そうだ戦争どうなったんだろうって思って、そしたらツタヤの大きいビジョンの字幕ニュースに、バグダッドに巡航ミサイル限定空爆開始、って書いてあって、あ、はじまったんだやっぱりって思いながら、デモ通るのとかちょっと見て、またホテル、割とすぐに戻ったんですけど、

ストリートには、現代社会の歪みが集約された絶望もあれば、それに抗う希望も確かに存在する。だが、たいていの人びとは、そのいずれにも与することなく日々を過ごしている。現実を無批判に受け入れているわけでもないが、だからといって具体的な何かに抵抗して生きているわけではない。もっと捉えどころのない、曖昧な不安をともなう現実感。岡田の戯曲はそうした若者の心性を、独特の言葉と身体によって巧みに浮き彫りにする。ストリート文化に内在するうちに、こうした想像力が欠落してしまってはいけない。

＊

このことに関して付け加えておけば、ストリートの文化、あるいはストリートの思想は、その多くが端的に言って、都会の文化であり、都市を生きる思想であるという事実も、しばしば忘れられがちだ。たとえば、東京の下北沢には独特のストリート文化が確かに息づいているが、同じような再開発問題に揺れる鞆の浦（広島県福山市）を包囲しているのは、ジャスコ的郊外＝ロードサイド文化の磁場に他ならない。

ストリートの可能性を語る以前に、そもそもストリートはどこに存在しているのか――その問いを決して軽んじることはできない。

関連 DVD

チェルフィッチュ、2007『三月の５日間』、プリコグ。
チェルフィッチュ、2008『フリータイム』、プリコグ。
中村友紀（監督）、2008『素人の乱』、素人の乱。

関連書籍

五十嵐太郎、2004『過防備都市』、中公新書ラクレ。
松本哉、2008『素人の乱』、河出書房新社。
毛利嘉孝、2009『ストリートの思想―転換期としての1990年代』、NHK ブックス。
岡田利規、2005『三月の５日間』、白水社。
岡田利規、2007『わたしたちに許された特別な時間の終わり』、新潮社。
都築響一、2009『現代美術場外乱闘』、洋泉社。

（いいだ・ゆたか　福山大学人間文化学部専任講師）

路地の生活を描きだすこと
── ヘンリー・メイヒューの「方法」に学ぶ ──

◇ヘンリー・メイヒュー著、ジョン・キャニング編（植松靖夫訳）、『ロンドン路地裏の生活誌 ── ヴィクトリア時代（上）（下）』（原書房、1992年）

岩舘　豊

社会的事象や人びとの営みがもつ「豊かさ」を、どのようにしてとらえ、表わし出すことができるのか。この問いを考える時、社会調査の領域を切り拓いた先達の営為から教わることは少なくない。そうした先達の１人が、19世紀半ば、大都市ロンドンの路地で生きる人びとの姿を描きだしていったヘンリー・メイヒュー Henry Mayhew（1812–87）である。メイヒューの大著 ***London Labour and the London Poor*** は1849年の新聞連載をもとにして、1861年から翌年にかけて出版が開始された。そのなかから「個人の姿が描き出されている部分」が抽出・編集されたジョン・キャニング編 ***The Illustrated Mayhew's London*** が、植松靖夫氏によって翻訳されたのが本稿で取り上げる**『ロンドン路地裏の生活誌』**（以下、本書）である。実際に本書では、「呼売商人」「娼婦」「行商人」「古着商」「大道芸人」「馬車の車掌」などといった人びとの姿が描きだされ、読む者を19世紀中葉のロンドンの路地へぐいぐいと引き込んでいく。では、メイヒューはどのような「方法」によって、路地の生活を描きだしていったのか。この問いを本書の記述から考えてみたい。

まず特徴的なのは、「街頭市場」や「劇場」といった都市の具体的な空間の描写である。メイヒューによって描かれた「喧噪と混乱に満ちた」市場では、野菜や魚などの食材、路上販売の飲食物、人びとの衣服や道端に並べられた古着、雑然と積まれた「がらくた」などが多様な色彩に満ち、人びとの売り声や物音が響き、香りや臭気がただよっている。

さらに際立っているのが、「呼売商人」「孤児の花売り娘」「羊の足を売る女性」「鳥の巣を売る街頭商人」「拾い屋をしている老女」「道化師」「盲目の老女」といった人びとの語りである。一例として「どぶさらいの男」の語りをみてみよう。

「おれはバーミンガムの生まれなんだが、物心のつかないうちに、ロンドンに引っ越したんだ。覚えている一番古いことは、テムズ川のカカルド・ポイントの河岸にいる時のことだな。干潮の時で、おれは膝まで泥につかっていて、だんだん深く沈んでいったんだけど、どぶさらいをしていた人が引っ張りあげてくれたんだ。…おれはカカルド・ポイントでもう二〇年はこの仕事をやっている。耳まですっかり泥につかってしまう危ない場所も知っているし、この床の上を歩くのと同じくらい、歩いても大丈夫なところも知っているよ。でも素人はやらないほうがいい。すぐに足を取ら

れて、沈んでしまうからな。ぬけ出すのはそう簡単じゃない。おれはあの人と長いあいだ一緒にいて、よくゼニを見つけたもんだよ、とくに排水溝に行った時にはな。とても面白かった。…泥の中に肩まで手を突っ込んで、シリング硬貨、半クラウン硬貨、たくさんの銅貨、そのほかいろんなものをつかみ上げるのさ。」（本書下巻 pp. 118–9）

こうした語りは、インタビューを相互行為という観点からとらえなおす論者たちによって再評価されている。取材が行なわれていた当時、「貧困層は自分自身の物語を話す能力がないと見なされていた」が、メイヒューは「この慣例となった見方を断ち切り、実際には貧困層が自分の生活について的確に話すことができるということを発見したのである」（ホルスタイン＆グブリアム 2004：p. 62）。

さらに本書では割愛されているが、原著のなかでは分類表や統計表が多用されている。どの商品がどのくらい売れているのか、収入や支出はいくらか、生活・労働条件に関するデータが収集されている。臨場感のある描写や生き生きとした語りは、詳細なデータによって裏付けられているのである。

このようにしてメイヒューは、路地に生きる人びとの「生きざま」に迫ろうとした。その仕事は中産階級的な偏見や可視化の欲望と無縁ではなかったが、「街頭の民に焦点を絞りこむことによって彼はそこに凝縮された大都会の姿をも同時につかみとろうと」したのだった（見市 1985：p. 380）。メイヒューの「方法」とは、「五感を使い尽くした」現場での観察と描写、多数の情報提供者の索出とその聴き取り、数量データや統計表の活用など、さまざまな技法や素材を縦横無尽に組み合わせていくというものだったのである。

メイヒューは、路地という空間とそこで生きる人びとの営みを描きだしていった「先駆者」「開拓者」（野久尾 1977：p. 93）の１人であった。自分の足でその場を歩き、耳をすまし、感じた事柄から出発し、あらゆる技法・素材・感覚を駆使して（なければ自分で生み出して）、路地の生活世界を豊かに描きだす、本書はこうした「先駆者」の生きた「方法」を伝えている。

参考文献

石川淳志・橋本和孝・濱谷正晴編、1994『社会調査―歴史と視点』、ミネルヴァ書房。

ジェイムズ・ホルスタイン＆ジェイバー・グブリアム、2004（山田富秋・兼子一・倉石一郎・矢原隆行訳）『アクティブ・インタビュー―相互行為としての社会調査』、せりか書房。

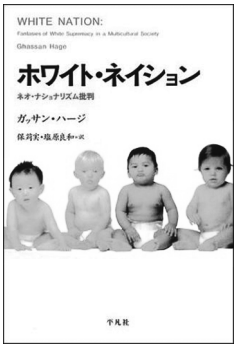
見市雅俊、1985「都市の生理学―ヘンリー・メイヒューの新しい読み方」、吉田光邦編『十九世紀日本の情報と社会変動』、京都大学人文科学研究所。

野久尾徳美、1977『社会調査論講義（１）―社会調査の理論と方法』、法律文化社。

（いわだて・ゆたか　一橋大学社会学研究科博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）

移民＝他者性のあらわれを管理する権力

── ガッサン・ハージ「空間の管理者（Spatial Managers）」──



◇ガッサン・ハージ著（保苅実・塩原良和訳）、『ホワイト・ネイション ── ネオ・ナショナリズム批判』（平凡社、2003年）

稲津　秀樹

レイシストと多文化主義者、どちらが善で、どちらが悪だと思う？このように問われたとき、あなたならばどう答えるだろうか。排外的なナショナリストであれば、前者のことを善、後者のことを悪だと答え、寛容なナショナリストであれば、前者こそが悪で、後者が善だと答えるかもしれない。このように、善／悪の二分法でもってナショナリズムの発現をみていくと、論者の立ち位置によってどちらを「よし」とするかが変わってしまうことがしばしばみられる。

だが、移民の存在を巡って、「彼ら彼女らは国から立ち去って欲しい」、と思うのと、「彼ら彼女らには国にとどまって欲しい」と思うのとでは、いったいどこに違いがあると言えるのだろうか。一見して、後者の方が他者という存在に寛容に振舞っていることから、前者よりも好ましい態度として、道徳的には見なされ得るかもしれない。

しかし、ここで権力の視点を導入すれば、彼ら彼女らの存在は、排外の対象として思い煩われる存在であるか、寛容に扱われるべき対象であるかのいずれかだとしても、そうした論争を行う人々に対する従属的な位置を強いられてしまっていることに変わりはないと言える。

精神分析人類学者のガッサン・ハージは、レイシストと多文化主義者に共通している上のような権力性に着目している稀有な論者である。彼は、著書『**ホワイト・ネイション**』において、レイシストと多文化主義者の実践が、どちらも主流国民によって支持されてしまうこと、それ自体に潜む「白人性ナショナリズム」の権力性をオーストラリアの事例から鮮やかに解き明かす。冒頭の問いかけに対して、彼が答えを与えるならば、以下のようになるだろう。すなわち、レイシストと多文化主義者は、その実践の面において異なっている。だが、両者は、移民＝他者という存在の排除と包摂を左右する権力を有している点で等しい存在と言えるだろう、と。

移民に対する権力性を明らかにするために彼が取り上げる事例は、非常に興味深く、また、ある意味ではとても「平凡」なものである。例えば、大学キャンパスの「落書き」にみられた「移民論争」をはじめとして、「文字通りのオージー（オーストラリア人）」を自認するゴミ清掃員、失業者のイアン、そしてヒジャブ（イスラーム教徒のスカーフ）を剥ぎ取る「事件」を起こした犯人へのインタビュー、更には、「事件」に抗するために作成されたビデオ映像の内

容や、多様性のある地域で暮らすことを喜ぶ白人女性の語り…といった具合に（これらの事例は多文化社会を考えていく上でとても興味深いものばかりだ）。

では、ハージによるこうした多文化状況を巡る思考が、なぜ、「ストリート」研究に重要なのだろうか。エスニシティ研究者にとっての「ストリート」を大まかに措定してみれば、それは、―『**ストリートコーナーソサエティ**』に遡っても―移民コミュニティ（イタリアンスラム）に暮らす人々の世界＝他者性が社会的にあらわれている場／空間であったと考えることができるかもしれない。だが、ハージによると、移民である彼ら彼女らのあらわれ方の背後には、主流国民を中心に構築された権力が確実に影響しており、その考察を抜きにしては、移民の「他者性」を議論していくことはできない。

とするならば、その権力とは一体、どんな人物の、どんな行為に体現されているのだろうか。その際に、彼が着目するのが、レバノンから来たイスラーム系住民のスカーフを剥ぎ取る／戻す者の「手」の動きに他ならない。「ナショナリズムとは、はっきりした実践や分類様式である以前に、身体のあり様なのである」と彼が述べる時、微細な身体の動きひとつをとっても、「国民として自分が願望できる何か」が反映されていると言っても過言ではない（p. 90）。

更に言えば、国民の身体的な行為のレベルに具現化されているナショナリズムの権力は、一定の「領域（テリトリー）」を念頭に置いて展開しているものでもある。例えば彼は、スカーフを剥ぎ取った犯人による、「ここには多すぎるほどあの人たちがいる」という語りに着目する。なぜなら、ここでの「『数が多すぎる』といった概念は、特定の領域空間を想定していないかぎり無意味で」あり、「ただ抽象的に『望まれない』ものや『多すぎる』ものなどありはしない」からである（pp. 76–7）。

よって、上の「手」の動きは、単なる暴力や寛容といった次元を越えて、イスラーム系住民が普段からスカーフを剥ぎ取られた状態でいるか、それとも、スカーフを着用した状態でいるのか、いったい、どちらがこの国＝ナショナルな空間においてより「望ましい」状態であるのかという、マジョリティの「願望」によって導かれた手の動きに他ならない。

このように、移民という他者性のあらわれは、それ自体が自発的なものとしてあるよりも、むしろ、彼ら彼女らを従属的なポジションに位置づけるマジョリティによる介入を抜きにしては考察できない。そして、その介入を促す権力は、「その空間に誰がどのように住むべきであるかを管理する」権利を主張するナショナルな空間の管理者（Spatial Manager）に具現化されているのである（p. 301）。

このように述べてくると、ハージへの批判にみられるように、彼の議論は、白人マジョリティとそれ以外のマイノリティの間の権力差を二項対立的に措定しすぎているとの誤解を招くかもしれない（Collins 1999：p. 391）。だが、そうした見方が誤解であることは、彼自身が述べているように、実際にスカーフを剥ぎ取った人物が、キリスト教を信奉しているレバノン系移民であったことを鑑みれば分かることだ。

ハージのインタビューによると、レバノン系の出自を就職面接で明かした途端に不採用となってしまったことをきっかけに、彼女はそうした「レバノン系」のイメージを表象するイスラーム信者に対する「手」を向け始めることになったという。そしてハージは、イスラームよりもキリスト教を信奉する方が、オーストラリアにおいては、より「ナショナル」なものとして相応しい要素であると彼女が思えてしまえるところにこそ、オーストラリアにおける「白人性ナショナリズム」の厄介な点があることを指摘する。つまり、オーストラリアの主流国民である白人にまつわるとされる諸々の要素（キリ

スト教信奉のみならず容姿や言語上の発音等…）が、ここでは「ナショナルな資本」とされ、それを蓄積すればするほど、移民であれども「空間の管理者」として振舞う権利を得られるように思えてしまう仕組みになっていると言うのだ（こうした彼のナショナリズム論の背景にはブルデュー社会学の影響がある）。

一方のマジョリティ側は、いくら移民がナショナルな資本を獲得したからといっても、それ以外の資本が得られていない理由を挙げて、「マイノリティ」出身者であるものを「マジョリティ」としては認めずに、依然として「マイノリティ」の枠組みに押し込めようとする。この点で、両者の間には不均衡が存在し続ける。けれども、上の事例のように、移民のあらわれを管理しようとするナショナリズムの権力は、マジョリティ／マイノリティの二項対立には還元されないところもあるのは確かだ。むしろ、マジョリティ／マイノリティの隙間が「ナショナルな資本」によって媒介されることで、マジョリティ側が素朴に想定してしまう空間秩序の「幻想」に同調するマイノリティの中のマイノリティが生じる余地はいくらでも出てきてしまうのだ。

主流国民が想定する国家像が最終的には「幻想」に行きつかざるを得ない以上、そうした資本蓄積のゲームには際限がない。そして、その過程に付随するマジョリティ／マイノリティを差異化させていく動きにも終わりがないと言えるだろう。とすれば、問題は、レイシズムも多文化主義も「国民」を中心に議論されている限り、「多文化的な現実」を「隠蔽」し続ける権力として機能してしまうという事実にこそ存在する（p. 44）。

ナショナルな空間管理の作動によって生じる暴力を批判し、かつ、「多文化的な現実」を思考の出発点においた社会学の営みが求められる理由はここにある。そして、複数のエスニシティーズ間で織りなされる現実があらわれる場／空間としての〈ストリート〉から、多文化・多民族社会を考えていくことの重要性は、ナショナリズムの高揚と共に、ますます高まっている状況にあると言えるだろう。

参考文献

Collins, Jock, 1999, “Review Article: Ghassan Hage *White Nation: Fantasies of White Supremacy in a Multicultural Society*”, *Australian Journal of Social Issues,* 34(4): 387–394.

（いなづ・ひでき　関西学院大学大学院社会学研究科博士課程後期課程）

欲望／ストリート／生活

◇大塚隆史、『二丁目からウロコ ── 新宿ゲイストリート雑記帳』（翔泳社、1995年）

山北　輝裕

本書は、新宿二丁目でゲイバーを経営する筆者が、二丁目という場や、そこでの出会い・泣き・笑いなどを、自身の過去も盛り込みながら、抜群の語り口調でふんだんに描いたものである。

新宿二丁目は世界一のゲイタウンであると筆者はいう。ここには、３つの特徴があるとされている。一つは、ゲイバーの数がおそらく世界一あるということである。そして、そのバーは少人数しか入れない小規模なものが多い。二つ目に、そのバーの料金は１杯1000～1500円ほどで、安く設定されている。そのため、いろんな客層が週末には何千人と集まるとされている。三つ目は、客が気に入った店を何軒もはしごすることである。「誰かいい人と巡り会いたいナ」と思って来ているのだから、お目当ての全くいないような店にグズグズしていては、他の店にいるかもしれない大きな「獲物」を逃してしまう。筆者はこの街と人の様子を「二丁目という小さな水槽をグルグルと回遊する」と表現する。

欲望が、ストリートへ人を誘うエンジンとなる。けっして、セックスのみの欲望ではない。筆者もいうように、二丁目にはセックスと、セックスにまつわることが多いが、そうした一枚岩的なイメージでとらえることはできない欲望がストリートをうごめくことになる。たとえば、非常に重要なことであるが、友人をつくることである。筆者は二丁目をとおしていかなる「関係」をもつことができるのかと、模索しながら滔々と語っている。ただ単におもしろい話を聞きたい。そのバーを拠点にしてスポーツをするサークルがうまれたりなどなど…。

そうした人びとがいかなる関係を結ぶのか。それは、本書を手にとって確かめて欲しい（そしてまた、これらのエピソードが赤裸裸に描かれること自体、筆者と集う人びとの関係性を現しているだろうし、さながら自分がバーの客になってしまった錯覚すらある、といってしまうと言い過ぎだろうか）。

ストリートにおいて発散される欲望というつかみどころのない力のあつまり（匂いや音、色なども含まれるだろう）を、社会学においてどのような角度から捉え返すことができるだろうか。そのためには、もちろん、クィア・スタディーズの知見は欠かすことができないし、現在の二丁目を語るには本書はやや古いのかもしれない(*1)。しかし、二丁目に限らず、ひろくストリートにおける、欲望と生活の重なりや、相反するダイナミズムに近づくために、本書は

決定版ともいえる貴重な一冊である。そして、欲望に真摯に向き合った筆者の、運動と生活、欲望の連続・非連続性についての言及も読者を引きつけることになるだろう。

なお、筆者のバーでは、ゲイを意識したアートを募集・展示し、出会いを模索している。ホームページでも紹介されているので、そちらも参照されたい。（http://www.asahi-net.or.jp/~km5t-ootk/tacsknot.html）

（＊1）たとえばゲイ・スタディーズについては、キース・ヴィンセントら**『ゲイ・スタディーズ』**、二丁目の現在については、竜超**『消える新宿二丁目』**などを参照（いずれも「関連文献」に挙げてある）。

関連文献

竜超、2009『消える「新宿二丁目」―異端文化の花園の命脈を断つのは誰だ？』、彩流社。

ヴィンセント、K.、風間孝、河口和也、1997『ゲイ・スタディーズ』、青土社。

（やまきた・てるひろ　関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP リサーチアシスタント）

「東京」的消費文化の「侵略」

◇月刊アクロス編集室、『「東京」の侵略 ── 首都改造計画は何を生むのか』（PARCO 出版、1987年）

谷村　　要

本書は、高度経済成長期以降における「東京」の周辺郊外への「侵略」を論じたものである。ここでいう「東京」について、本書では明確に定義されていないが、東京の「山の手」が担ってきた東京のライフスタイル、さらには消費文化をさす言葉として看做すことができる。

本書は大きく三部から構成されている。第一部は「移動する東京」であり、東京・本郷周辺にあった「山の手」がかつてなく拡大し、埼玉県・多摩市・神奈川県をまたがる新興住宅ゾーン（「第四山の手」）にまで広がっている現状とその影響を論じている。第二部は「分散する東京」をテーマとしており、「東京」の郊外への拡大を招いた根本的原因である東京の機能集中とその分散を試みる1980年代当時の動向を取り上げている。第三部は「漂流する東京」という主題の下、郊外型の大規模マンションやニュータウンの分析を通じて、「コミュニティ」を求める「東京」の不安定性を指摘する。

「東京」の拡大を「侵略」という言葉であらわしているのには本書の編著者であるアクロス編集室いわく、「アイロニカルな含意」があるという。それは「内部矛盾を回避するための惨めな非常手段」として、「東京」的なるものが郊外への拡大を図っているのではないかという問題意識に基づく。この場合の「内部矛盾」とは「トラディショナルな都市文化」やソーシャルキャピタルの構築を犠牲にして、ただひたすら変化し拡大を続けうる東京のあり方を指している（pp. 220–221）。**『月刊アクロス』**がパルコ＝西武セゾン系のマーケティング雑誌であったことを考えれば、そこには東京の都市開発を担ってきた当事者でもあるパルコ＝西武セゾン的消費文化の郊外への拡大に対する「アイロニー」も当然含まれているのであろう。

以上のように描写された「『東京』の侵略」は、本書の発行から20年が経過した現在、「東京」的な消費文化の地方への拡散という形ですでに日本全国に現れている。郊外のロードサイドショップ群、大型商業施設がその象徴である。何でも買うことができるが、しかし、「どこでもいい場所」（若林 2007）となった、場所性の喪失した郊外――このような状況は、すでに多くの論者によって「ファスト風土化」や「ジャスコ化」として批判的に論じられてきており、ここで改めて述べる必要もないだろう(*1)。

一方で、都心部では、1990年代後半以降に、個人の趣味の表出により都市の特徴が築かれていく「趣都化」現象が起こる(*2)。秋葉原や裏

原宿、下北沢がその代表格である。行政や民間企業により開発され意味づけられる都市から、個人の欲望が表出し、集まり、交差するストリートが前面化する都市へ。「東京」的消費文化を模倣した郊外と鏡合わせのように新しい消費文化が「東京」の中心では出現している。

本書においても、「横浜・鎌倉・湘南といった東海道筋のクラシカルな文化イメージ圏で今後何か新しいものが生まれるかどうかは疑問」であり、新しいものが生まれる場所として「マークするとしたら」、「東京」文化圏となった「東京都緑区（引用者注 傍点は原著ママ。実際は神奈川県横浜市緑区である。）」であることが論じられている（p. 18）。消費社会の下、変化を続ける「東京」とその「東京」の消費文化を模倣する郊外―近年、地方で起こっている現象として「アニメ聖地」化現象が注目されているが(*3)、それすらも一面的には、「東京」の新たな消費文化である「趣都」の「侵略」として捉えることもできるだろう。

本書に書かれていることはすでに過ぎ去りしことである。しかし、「侵略」の進行中に抱かれた編著者の危機感は未だに有効な問題意識をはらんでいる(*4)。より流動性が進んだ「ゼロ年代」においては、あらゆる資本において東京と地方の間に絶対的な格差、非対称性が顕在化しつつある。そう、われわれは「『東京』の侵略」は容易に想定するかもしれないが、「『東京』への侵略」は想定しえないのだ…（「『東京』への回収」ならば想定しうるかもしれないが…）

その状況において、ストリートにはどのような形で「東京」的消費文化に対抗する萌芽は生まれているか。あるいは、さらに対抗が困難な状況に陥っているのか。われわれがストリートの現在を読み解く際の有効な視座となろう。

（＊1）三浦展（2004）は、「地方農村部の郊外化」を「ファスト風土化」と名付けた。同様の状況を東浩紀・北田暁大（2007）は「ジャスコ化」「国道16号線的」と呼んでいる。

（＊2）森川嘉一郎（2003）は、東京・秋葉原を事例として趣味が都市を特徴づける動向を論じ、そのような趣味が表出した街を「趣都」と呼んだ。

（＊3）埼玉県北葛飾郡鷲宮町や兵庫県西宮市などは、アニメ作品の舞台となった場所として多くのアニメファンが訪れる「アニメ聖地」になっている。各地域では、それを利用したまちおこしがなされており、その経済効果が注目されている（「我が町オタクの集う地に」日経流通新聞　2008年11月12日３面）。

（＊4）なお、当時の『月刊アクロス』編集長は先に名前を挙げた三浦展であり、彼の「ファスト風土」論に至る問題意識を本書に見ることができる。

参考文献

東浩紀・北田暁大、2007『東京から考える―格差・郊外・ナショナリズム』、日本放送出版会。
丸田一、2008『「場所」論―ウェブのリアリズム、地域のロマンチシズム』、NTT 出版。
三浦展、2004『ファスト風土化する日本郊外化とその病理』、洋泉社。
森川嘉一郎、2003『趣都の誕生―萌える都市アキハバラ』、幻冬舎。
若林幹夫、2007『郊外の社会学―現代を生きる形』、筑摩書房。

（たにむら・かなめ　関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP リサーチアシスタント）

沖縄の暴走族とゴーパチ

◇『チャンプロード』（月刊雑誌、笠倉出版社、1987年～現在）

打越　正行

雑誌『チャンプロード』は、日本社会におけるユース・サブカルチャーズである暴走族と旧車會を対象とし、またそれらを主な読者とする月刊誌である(*1)。暴走族とは日本社会において主に15歳（中学卒業）から20歳前半の少年によって組織されている若者集団のひとつである。主な活動は、週末の深夜に、特攻服をまといチーム名が描かれた旗を振りながら改造したバイクに乗り、爆音を出しながら公道を走ることである。このような活動はたびたび逸脱行為として取締りの対象とされてきた。他方で、学校や就労世界から排除された下層若者である彼らは、地元の暴走族に属することでアイデンティティを獲得し、その文化とそこでの仲間とのつながりを通じて社会化され、再び就労世界や家庭へと接続されてもきた。

1970年代に日本社会で誕生した暴走族は、現在、都市部では衰退し、一部の地方でのみ活動を展開している。そのような変化はあるものの、同誌が1987年に創刊して以来、暴走族少年らに与えた影響は非常に大きい。例えば、ある県では販売禁止雑誌に指定された。他方で、暴走族を中心とするヤンキー文化の現役世代にとっては他の地域や近隣地区へのアピールといった交流を引き起こし、また引退世代にとってもかつての思い出を記憶するという重要な役割を担ってきた。これらの役割は、同誌のなかのほとんどのコーナーが暴走族少年らによる投稿や要望によって成り立っていること(*2)、また編集者が全国各地に直接に出向いて取材を行うという２つの特徴によってこそ担われてきたし、それらによって同誌の水準は維持されてきたと考えられる。

続いて、同誌の内容について紹介する。同誌にある暴走族を対象とした記事には「爆音とともに生きる戦士たち」と、「俺ら暴ヤン単車隊」がある。そしてここ数年の間に、この２つの記事の投稿元の多くが、都市ではない地方、なかでも沖縄であることは注目に値する。それらの記事に沖縄の暴走族が掲載された比率は、それぞれ少なくとも28.3%、21.6%以上である(*3)。そのようなことから、私は現在、沖縄において暴走族・ヤンキー少年・少女を対象としたフィールドワークを展開している。その調査からは、1970年代の日本社会で誕生した暴走族が現在の沖縄で独自の変化を経て活動を展開していることを確認できた。では、いかように暴走族は沖縄で受け入れられたのか。また、そこでいかなる変化が生じたのか(*4)。その過程をみることができるのがストリートである。

地元のアジトでいつもお世話になってる暴走族の先輩と後輩。これからゴーパチへ出陣する直前の一コマ。（撮影：打越）

ここで沖縄の暴走族、ヤンキー少年・少女らにとってのストリートとは、深夜のゴーパチである。ゴーパチとは沖縄の国道58号線のことであり、そこには匿名性、流動性、混淆性などの特徴を指摘できる。またこれらの特徴に加えて、なによりゴーパチには緊張感がある。警察と暴走族との衝突にはお互い相手に弱みを見せられないという意地が垣間みえる。もちろんそのやりとりの歴史で、お互い「この前のヤツだ」ということはわかっている。パトカーがバイクを追いかけ、そしてそれから逃げるだけではなく、最終的にはお互いに相手めがけて追突を試みる。猛スピードでお互い衝突寸前まで迫り、急ブレーキで衝突を回避する。このとき両者には50cm 程の隙間しかない。おそらく、先にブレーキを踏んだ方が負けなのだろう。警察にとっては威信を失う程度だが、暴走族少年にとっては鑑別所行きとなる。そして先週も先々週もその格闘を見てきたギャラリーはそのことをしっかり記憶している。このような激しい夜は、月に一回くらいにしかないものの、実際に遭遇すると下手なサーカスより興奮する。ストリート、つまりゴーパチとは警察と暴走族が激しくぶつかる空間／場所である。ではそこでは、お互い何に対し、何を争いぶつかっているのだろうか。

暴走族少年の多くは、学校からはじき出された若者である。そこには沖縄の言語、文化とそれを日本化する力がぶつかる。また彼らは家庭での生活も不安定である。そのために、沖縄に入ってきた日本生まれの暴走族は、彼らによって流用された。そこには一世代超えた伝統的沖縄文化をまとったおじい（祖父）、おばー（祖母）との葛藤がある。また季節労働で沖縄の外で働く場合には、沖縄出身であることをもとに罵言を浴びせられる。つまり、彼らは学校、家庭、そして職場のどこでも日本人でも沖縄人でもないにもかかわらず、同時に日本人、沖縄人であることを求められる。

インタビュー中の一コマ。私が乗車しているこの原付バイクで、調査中に3000キロ走破した。（撮影：ユーミ）

彼らはその状況を生き抜こうと自前の若者集団を組織する。そこでは、年齢をもとにした組織形態にもとづいた自治が生じた。また、一般社会とは異なる規範がある。彼らにとって、地元は自治を行う自らの陣地である、つまり地元で何が正しいかは独自の手続きに沿って自らが決める。しかし、一般社会では場所に関係なく規範は普遍的に適用される。ゴーパチではそのせめぎあいが生じている。彼らの多くはパトカーの車内や取調室における違法な取り締まりにはあきらめの態度を示す。彼らは、自らの陣地である地元やそのグレーゾーンであるゴーパチでやりたい放題したのだから、相手の陣地で

記事の名称	「爆音とともに生きる戦士たち」	「俺ら暴ヤン単車隊」
取材対象	同じ暴走族に所属する２人の少年・少女	１つの暴走族チーム
取材形式	ヤンキー界の重鎮こと岩橋健一郎氏によるインタビューと写真撮影 （インタビューが中心）	写真撮影とインタビュー （写真撮影が中心）
記事の数	43個　毎月掲載なので取材要請は多いと推測可能	12個　取材を行った月のみの掲載なので取材要請は少ないと推測可能
取材前の準備	２人以外のメンバーは登場しないので、着用する特攻服と、自らが事前に撮影した写真の準備であり、事前準備は比較的容易	暴走族のメンバー全員がそれぞれ特攻服を着て、旗を持って集合し、改造したバイクを10台以上そろえ、全員集合の写真をその場で撮影するので、事前準備は大変
取材を要請する暴走族の特徴	活動が活発な暴走族はもちろん、活動が下火になった暴走族や少人数の暴走族でも取材要請は可能	世代をまたぐ規模のメンバーの確保、それに加えてチームワーク、連絡体制、資金源など安定していないと取材要請は不可能
掲載された暴走族の都道府県	千葉県、埼玉県、栃木県、神奈川県、静岡県、茨城県、沖縄県	栃木県、埼玉県、兵庫県、大阪府、福岡県、沖縄県

は相手のやりたい放題も認める。同時に「次こそは…」と内なる闘志を抱く。

彼らがゴーパチで闘っている対象は、沖縄県警である。ただ彼らにとって、それはしんどい日常を行き抜く過程で作り上げた地元での自治、つながりを守るための闘いといえる。このように、都市部でその役割を終えたかにみえる暴走族ではあるが、現在の沖縄の暴走族少年たちは、上述したストリートでの反抗の実践からもわかるように、暴走族を地元の生活の基盤として独自に読み替えながら、なんとか生き抜いてきた。たとえ地元での彼らの自治が無秩序に映ったとしても、それを解体することは誰にもできないし、それは誤ってさえいる。完全には理解できないことを前提に彼らの声を丁寧に聞き、支離滅裂で時には誤っている声に応答し続けること、これこそ私たちが『**チャンプロード**』から学ぶべきものではなかろうか。同誌の紹介というより同誌に触発されて始めた私の調査報告になったが、同誌の読み方としてあながち間違っていないだろう。

（＊1）ここでは、同誌の暴走族に関する記事についてのみ扱う。

（＊2）同誌には、投書した体験のない少年でさえもそれを可能とする仕組みが施されている。その他にも、写真と活字の比率、文体、構成、広告など細部にわたり配慮がなされている。

（＊3）この比率は、2005年１月から2009年12月まで５年間の同誌60冊のうち、現時点で入手できた43冊をもとに計算した。入手できていない17冊には沖縄の暴走族は掲載されてない前提のもとで計算したため実際の比率はこれより高い。それぞれの記事は上の表を参照せよ。

（＊4）詳しくは、拙稿（打越 2008、2009）で述べている。

関連文献

小田亮、2009「生活の場としてのストリートのために――流動性と恒常性の対立を超えて」関根康正編『ストリートの人類学（国立民族学博物館調査報告）』81：489–518。

鈴木裕之、2000『ストリートの歌―現代アフリカの若者文化』、世界思想社。

鈴木慎一郎、2000『レゲエ・トレイン―ディアスポラの響き』、青土社。

打越正行、2008「仕事ないし、沖縄嫌い、人も嫌い――沖縄のヤンキーの共同性とネオリベラリズム」『理論と動態』1：21–38。

――――、2009「植民地沖縄におけるネオリベラリズムと反抗――ヤンキー・サブカルチャーズ研究序説」『部落解放』15：73–90。

（うちこし・まさゆき　社会理論・動態研究所）

路上、ゴンダール

── 川瀬慈による３つの短篇 ──

◇ *Room 11, Ethiopia Hotel*（2007年制作）
『ラリベロッチ―終わりなき祝福を生きる』（2005年制作）
『僕らの時代は』（2005年制作）

白石　壮一郎

画面越しに少年の顔がアップであらわれたかと思うと、かれは撮影カメラの上部に付属した録音マイク保護用スポンジを抜き取り、竹輪状の筒になったスポンジを目にあてがって向こうからこちらを覗いておどけてみせる（***Room 11, Ethiopia Hotel***）。画面に光が与えられてから数秒間のこの冒頭シーンは、映像作家のねらいを雄弁に語る。撮影者と被写体との関係性の写しこみ。映像による記述行為そのものの相対化。

川瀬は日本からエチオピアの古都ゴンダールに人類学の調査でやってきた大学院生（当時）、そしてこの作品に登場するのは当時それぞれ15歳と16歳のふたりの少年である。窓から路上を捕らえるカメラは、作品タイトルである宿の一室から出ることはない。ひるまの通りを行きかう人びと、商店の窓を一心に磨く青年、道端に座って物思いにふける人、そしておとなに混じって、自動車の窓拭きや靴磨き、物売りなどをしながら路上で稼ぐ少年たちの姿。川瀬の部屋にやってきたふたりも、家を持たず施設にも入らず路上で稼いでいる少年たちだ。カメラ越しの交渉で川瀬から出資してもらったふたりは、意気揚々と部屋を出て深更までビスケット、タバコ、コンドームなどの小物を路上で商う。

Room 11, Ethiopia Hotel

〈ストリート〉で生起するものごとを記述するのに、映像はときとして文章に比べようもなく豊かで生彩ある表現媒体となる。〈ストリート〉とは路上であり途上である。そこでの通過・交差・滞留のプロセスでいかなる社会関係の〈場〉ができていくのか。文脈の複線化などの技巧を凝らそうとも、事象をリニアに説明するためのものだということは文章表現にとってかわらない本質なので、映像の記述情報量にはかなわない。じっさいに世界じゅうの路上に日々息づいている数々の流動的な関係性の〈場〉は、２～３年後に同じ所に足を運んだとしても

「僕らの時代は」

同じであるとは限らない。そうした〈ストリート〉的なものをどのような視点で記述したらいいのかというエスノグラファーの欲望に、良質のドキュメンタリー映像作品は応えてくれる。

川瀬の短編にはゴンダールの〈ストリート〉で出会った人びとが、かりそめの主人公として登場する。生業と交換の場としての路上。家々を訪問するラリベラと呼ばれる吟遊の物乞いの老夫婦（**『ラリベロッチ―終わりなき祝福を生きる』**）、祝宴などで演奏するアズマリと呼ばれる音楽職能集団の卵である少年たち（**『僕らの時代は』**）。これら２作品ではカメラは川瀬とともに路上に出て、われわれは川瀬の肩越しに人々のやりとりに割って入ることになる。歩く人の視線で、かれらの路上でのなりわいが映し出される。

これらの短編で主人公となったかれらはゴンダールの周辺的な存在である。おそらくわれわれがよそ者としてこの都市に到来し、通りを一日中じっと眺めた続けたとき、かれらは歩き続けるけども目的地をもたない、どこかよそ者性を帯びた巡回者として目にとまることだろう。都市でまともに暮らし、働き、婚礼や降誕祭などの祝祭のなかにいる人びとは、通過し、集まっては散り家路につく存在として主人公たちの背景をなし、しばしば主人公たちとのやりとりのなかでかれらの微妙で両義的な社会的位置を際立たせる役割を負う。

映像に映しこまれる川瀬自身と主人公たち、そして路上の人びととの現地語でのやりとりもまた、それぞれの短い物語のなかで中心的な位置を占め、われわれを〈ストリート〉への介入に誘う効果を発揮する。ラリベラの夫婦やアズマリの少年たちとの道行きを、周りの通行人や住人がオーディエンスとして見守ったり、野次を飛ばしたりするシーンも多くみられる。カメラに向かっていい笑顔を投げかける者もいれば、なかには当然、撮影という行為に強く反撥し異議を唱える者の姿や声もある。「こっちに来るな！そいつ（川瀬）もつれて失せな！…（中略）…撮ってるじゃないかよ！」「じゃあ撮影のなにが悪いっていうんだい？」「エチオピアは乞食だらけと外国で思われるだろうが！」（**『ラリベロッチ―終わりなき祝福を生きる』**）。

「ラリベロッチ―終わりなき祝福を生きる」

人類学や社会学のフィールドワークは現地の人たちとの共同作業であり、それなくしては成立しない。しかし調査成果としての書物である民族誌には、記述する著者によって編制された知識体系が開陳される。ここにも文章による記述のひとつの限界がある。その都度の共同作業を言語で再構成して書き込もうとするととんでもない紙数を費やしてしまうだろう。これまで文章によって発表された多くの「実験的民族

誌」が不発に終わったりキワモノ扱いされたりしたこともこれに関係する。上記のような、調査や撮影を生活域への侵犯、あるいは一方的表象による簒奪ととらえる人びととの緊張感あふれる応酬も含め、こうしたやりとりを映像で記述することは、調査という行為を反省的にとらえたり、ひろく知らせたりするためにも有効なのだ。

ところで近年サービスを開始したGoogleストリート・ビューもまた映像でストリートをとらえるものにちがいないが、そこにあるストリートは上記の〈ストリート〉とはまったく別物だ。ゴンダールの路上は、いわば人びとの生活域やモラルがせり出している公共空間であり、お役所と資本とが意味世界を統制しているような日本のアスファルト道路とは決定的に異なる。だがそれだけではない。そこにあらわれる光景には、先に述べたエスノグラファー（とその肩越しに覗き見るわれわれ）の欲望のようなものがみあたらず、おなじ歩く人の視線による介入であっても、映すものと映されるものとの関係がまったく正体不明なのだ。われわれがなにより違和感をおぼえるのは、そのためだろう。川瀬の映像作品をみてゴンダールの〈ストリート〉へ憧憬めいた感情を抱くのも、Googleストリート・ビューへ違和感をおぼえるのも、われわれのストリートへの介入が、現在いかに困難になっているかということの証左なのかもしれない。

川瀬慈 webサイト

http://www.itsushikawase.com/

関連文献

現代思想臨時増刊号、2007『総特集・ドキュメンタリー』、青土社。

北村皆雄・新井一寛・川瀬慈編、2006『見る、撮る、魅せるアジア・アフリカ！―映像人類学の新地平』、新宿書房（DVD付）。

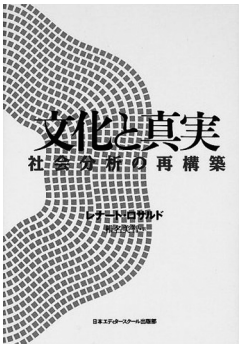
Prosser, J., 1998, *Image-based Research: A Sourcebook for Qualitative Researchers.* Routledge.

Ruby, J., 2000, *Picturing Culture.* The University of Chicago Press.

佐藤真、2001『ドキュメンタリー映画の地平―世界を批判的に受けとめるために（上・下）』、凱旋社。

（しらいし・そういちろう　関西学院大学大学院社会学研究科大学院GP特任助教）

〈境界域〉としてのストリート
──〈平凡〉な事例を調査するための社会分析の再構築 ──



◇レナート・ロサルド（椎名美智訳）、『文化と真実 ── 社会分析の再構築』（日本エディタースクール出版、1998年）

川端　浩平

ヒスパニック系アメリカ人の人類学者、レナート・ロサルドの**『文化と真実 ── 社会分析の再構築』**の序章に次のような印象的な一文がある。「しかし実際に、ひとは自分にとって一番大事なことを、つねに一番詳しく述べるものなのだろうか」(p. 8)。ある調査目的のためにフィールドワークを行い、その対象について記述する者ならば常に問い返される不安・疑問であろう。私たちはそのような不安を払拭することと、より説得力のある記述によって疑問に応えようとする真摯さのあいだで悩み、考え、そしてその繰り返しの果てに、全体の構図が浮かび上がってくるのを待つ。本書でロサルドが社会分析の再構築を試みるという壮大なプロジェクトのなかでたたき台としているのは、そのような不安と真摯さのうえに先人達が構築してきた「文化的深遠さ」や「文化的洗練」を「分厚く」記述することによって文化を描き出すという方法である。そのような既存のアプローチに対してロサルドは、文化についての記述は「濃密」さのみではなく、その「迫力」を探り出すべきであるという方法を提示する。この小論では、ストリートの調査における調査者と対象者の関係性を改めて問い直すために、本書におけるロサルドの試みを（1）調査者のコミットメント（2）対象の記述、という二つの観点から読み解いてみることにする。

フィールドワーカーは、対象者とどのような関係性にあるのか。あるいはどのような関係性を構築することによって何を見ようとするのか。ロサルドはかつてフィリピンで首狩りの儀式を行っていたイロンゴット族の年配の男たちに問う。なぜあなたたちは首狩りをするのか。その質問に対して男たちは、いかに近親の死別における怒りが首狩りへと駆り立てるのかを語った。しかしこの説明はロサルドにとっては退屈なものだった。それは、「単純すぎて、厚みがなく、不明瞭で、信じがたく、ステレオタイプなもの、さもなければ不十分なものに思われたので、無視していた」(p. 9)。それまでの彼は、人類学者の唱える交換理論をこの事例にあてはめることに懸命で、「首狩りは、ひとつの死（首狩りの犠牲者の死）によって、もうひとつの死（近親者の死）を帳消しにするやり方から生じたという考え方」を前提としていたのである。しかし、彼の最愛のパートナーである人類学者のミッシェル・ロサルドがフィールド調査中の事故によって亡くなってしまうという自分自身の激しい喪失の体験から「悲しみのなかにある怒りの激しさ」が理解できるようになり、

年配の男たちの言葉の意味を理解できるようになったという。まさにその瞬間、かつてはとても平凡であると考えていた言葉が「迫力」を持って立ち現われてくるのである。このようなロサルドの調査対象者へのコミットメントは、自分（調査者主体）の「弱さ」（vulnerability）を「他者」（調査対象者）に開示していくことを契機として、調査者の思い込み、思惑、価値観とともに理論的な枠組みが問い直され、フィールドのリアリティへとさらに一歩踏み込むことを可能としている。

ロサルドによる対象の「迫力」への接近法は、対象をどのように記述するのかということにもかかわってくる。ある特定の対象を記述するとき、その対象を差異化し特徴づけるための分類枠組みが必要となってくる。そしてそれは質量的なバランスでインパクトを持って読者に提示されることが求められる。ロサルドは、境界線によって調査対象を囲み、均質な集団・現象としてとらえたうえで「濃密」に記述するのではなく、フィールドとそこで生きる人びとの営みを「性的志向、ジェンダー、階級、人種、民族、国籍、年齢、政治、服装、食べ物、趣味」といった枠を中心に現れる「境界域」としてとらえている。このアプローチでは記述対象のハイブリッド性を描き出すことが可能となる。ハイブリッド性を描き出すという方法のメリットは、対象を均質的な文化集団としてではなく、多様性をエンパワーするという視点が担保されることである。しかしそのような多様性を担保するための戦略も、例えばマイノリティのアイデンティティ政治に対するマジョリティのバックラッシュが典型的なように、ある集団の多様性を探すという視点から、多様性そのものが前提とされることにより、「意図せざる結果」として異なった多様性同士が競合・衝突することも肯定されてしまう。しかし、ロサルドのアプローチをハイブリッド性の抽出という点のみではなく、「境界域」という定義しがたい領域や対象を描き出す方法論として敷衍していくのならば、例えば社会調査や分析によって無視されがちで雑多なものや平凡だと考えられている対象の「迫力」を描き出すという方向性も可能である。

ロサルドの方法論を敷衍してみるならば、これまでの社会調査や分析から抜け落ちてきた「平凡」な日常的実践の領域へと介入することができる。「平凡」な日常的実践のリアリティのもつ「迫力」をいかに描き出すことができるのか。そしてまた、何のためにそれを描き出す必要があるのか。著者はこれまで、自分が育った「地方」におけるフィールド調査で、論文を執筆するための事例としてはあまりにも「平凡」で、理論的な枠組みとは矛盾する大多数の現象や語りに出会うたびに、その対象が放つなんともいえない「迫力」を新しい枠組みを持って示せるのかに苦心してきた。おそらくそのための方法はいくつもあるだろうが、肝心なのは「平凡」な領域に閉じ込められた主体を本質化するのではなく、権力関係によって措定される二項対立を乗り越えるための方法であるということを確認することである。例えば調査者と対象者、マジョリティとマイノリティ、中心と周縁、都市と地方などのあいだに措定される「境界域」への介入を、両者の二項対立を乗り越えかつ多様性を担保するための調査研究方法として再構築していくこと。その過程で調査者がとても平凡だと思い込んでいた言葉や事象が「迫力」を持って立ち現われてくるかもしれない。ストリート＝「境界域」への介入は、そのような新しい理論と実践の地平を切り開くことを可能とするだろう。

お薦め図書

ド・セルトー、M.、1980（山田登世子訳）、『日常的実践のポイエティーク』、国文社。
藤田敬一、1987『同和はこわい考』、阿吽社。
保苅実、2004『ラディカル・オーラルヒストリー——

先住民族アボリジニの歴史実践』、御茶の水書房。
Michael Billig, 1995, *Banal Nationalism*, Sage Publications.
玉野井芳郎、1978「地域主義のために」玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司共編、『地域主義―新しい思潮への理論と実践の試み』、学陽書房。

（かわばた・こうへい　関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP 特任助教）